



鳥獣害の背景にあるもの

現代、日本の野生動物と人間は、その関係の中で葛藤や摩擦があり大きな軋轢が生じています。その要因は、文明が進化すると共に、人間はもともと自然の生態系から抜けだし、野生鳥獣を無視した人間中心の自然環境を構築したことが考えられます。

国土の7分の1にも匹敵する森を人工林化。また、野生鳥獣の生息地である森林の開発を進め、特に西日本では、天然林の大半が開発され、そこが暮らせない野生動物は危機的状況に陥っています。

このような過酷な状況の中でも野生鳥獣は、保護政策や天敵オオカミの絶滅、地球温暖化など様々な要因によって個体数が増加し続けています。

例えば、シカでは2011年のシカ推定個体数は全国で261万頭。捕獲の状況が今後とも同程度であれば、2025年には500万頭にまで増えるという試算もあります。

これからの野生鳥獣と隣り合わせの生活は続きます。私達は、今実施している獣害対策だけではなく、これから先、野生鳥獣と付き合っていく方法について、今しつかりと考えるべき時期にさしかかっているのではないのでしょうか。

今後、対策を考えるとき、野生鳥獣側の環境も考慮した対策をたてないと、人間にとっても野生動物にとっても不幸な状況が生まれてしまいます。野生鳥獣それぞれも森のいち住人であり生態系の重要な構成員なのです。

里山の荒廃と中山間地域の疲弊
対策のひとつとして、野生動物と人間の生活圏の境界線をはっきりさせることがあります。

昔は、奥山と人の生活圏の間には、生活の場とは別に、人によって管理・利用されていた里山があり、そこはちょうど動物エリアと人間社会の中間に位置

し緩衝帯の役目を果たしていました。だが、農村の近代化に伴い化学肥料の導入や燃料革命によって里山は荒廃し、その機能は消えてしまっています。

大都市では人口が増加する反面、中山間地域では人口減少・高齢化によって、農地・山林など農村資源の維持管理や、農道や畦畔の草刈りもままならない状態になっています。

中山間地域の衰退が農地への鳥獣の侵入を許し、野生鳥獣と人間の軋轢が高まる要因になっています。中山間地域の衰退が耕作放棄地を拡大させています。

日本人の心の奥にある棚田の風景は既に昔の話。野生鳥獣の格好の棲家になる耕作放棄地が日毎に拡大するという最悪な状態になっています。

野生鳥獣の生活圏が減っていること
国策により、国土の7分の1にも匹敵する森をスギやヒノキの人工林に作り変えました。

人工林化は、20世紀の末にようやく増加が止まったものの、天然林はその間にどんどん伐

採されました。針葉樹の森では多くの野生鳥獣は生きてゆけないのです。森林の破壊も深刻です。全国的に林道やダムが開発されるなど、森林の大半が開発されています。野生動物は危機的状態に陥っています。

現在、日本の林業は完全に破綻しています。現在国産材は、廉価な輸入材に押され低迷状態が永らく続いています。現在、日本の森林は、国有林や県有林の一部で手入れが行われてはいませんが、民有林では、完全に放置状態です。放置された人工林は、森の中に光が差さず、下層植生はなくなり、野生鳥獣が棲めない空間になっています。台風や冬の積雪などでの倒木が心配されています。

外来生物問題
被害は農林水産業は無論、生活環境被害や在来種の駆逐、交雑など生態系破壊にまで及びます。元々はそこに生息していなかったはずの外来生物が農林水産物を食ったり、毒で人体に害を与えたりす

たり、逃げ出したりして野生化した動植物を「外来生物（外来種、移入種）」と呼びます。我が国に生息する外国起源の生物の数は分かっていないだけでも約2000種ともいわれます。これらは、意図的、非意図的の違いはありますが、人間の活動に伴って日本に入ってきているという点で共通しています。外来種の中には、畑を荒らしたり、漁業の対象となる生物を食ったり、危害を加えたりして、農林水産業に被害を及ぼすものもいます。その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を「侵略的外来種」と呼ばれます。「侵略的」というと、何か恐ろしい生き物と思われがちですが、本来の生息地ではごく普通の生き物として生活していたのです。たまたま持ち込まれた場所が、その外来種にとって住みやすい環境であったり、食べやすい生き物や農作物が豊富にあったりすることによって大きな影響を引き起こしてしまっただけで、決してその生き物の自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。

日本では「ごく普通に見られる錦鯉が世界各地で侵略的外来種に指定されているのと同じことです。

編集責任者
山村 準
tel: 0595-63-1725
Email: jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：200部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

る被害が多発しています。対策は駆除ですが、定着初期過程での対策が必要です。

中山間地域の活性化、里山・森林の再生、解決への道のりは決して平坦でなく、一旦壊した自然を元に戻すには気の遠くなるような時間が必要です。だが、次世代のためにも私達が是非解決しなければならぬ問題です。

里山での人と野生鳥獣との適切な関係の構築、中山間地域の活性化、森林の再生や、棲み分けを図る上での育成林の造成などが喫緊の課題となります。また、今後棲み分けを図る上で重要なことは保護・管理（捕獲）です。計画的な保護管理が必要で、これからは単なる駆除ではなく科学的な計画に基づく管理が求められます。

計画的な管理は野生鳥獣の保全にもつながり大切なことです。

「侵入・侵略的外来種」という表現は、人間の身勝手な発想からでた用語だと思えます。外来種がいることのよ

うな悪いことが起きるのでしょうか？

最も心配されているのは、生態系への影響です。生態系は、そこに共生する種の間での微妙なバランスのもと成立しています。そこに外来種が入ってくると、外来種が入ってくるにより、在来種が食べられたり、餌を横取りされたり在来種との間で競争が起こり、在来種は駆逐され食物連鎖のバランスが大きく崩れます。交雑による遺伝的攪乱も起こります。例としてはアイワンザルとニホンザルの交雑の事例が有名です。毒を持っている外来種が入ってくると、咬まれたり、刺されたりして人の生命や身体に危険が生じる恐れがあります。このように外来種の影響も大きいです。

全ての外来種が悪影響を及ぼすわけではなく、自然のバランスの中に順応してし帰化してしまう生物もいます。外来種が定着し爆発的に増え、在来種を圧倒するようになると、これを完全に駆除して

以前の生態環境を取り戻すことはほとんど不可能に近いといわれています。定着過程初期での対策が重要になってきます。一度破壊された自然環境を元に戻すには長い時間が必要です。自然環境が戻ったとしても、生態系は元に戻るとは限らないのです。

外来種による深刻な問題が日本でも数多く発生しています。沖縄県や鹿児島県奄美大島に、ハブ退治のために意図的に導入したマングースがいます。ハブは夜行性なのに、マングースは昼行性のため、肝心のハブ退治には効果が無く、かえって貴重な在来種がマングースにより迫害を受けています。アマミノクロウサギや国の天然記念物のヤンバルクイナの絶滅が危惧される状況になっています。

大なり小なりこのようなことが日本中で起こっているのです。多くの外来種が生息する日本において、何が日本固有の在来種で、何が外来種であるのか判断としない状況になっています。

今後、私達一人一人が、外来種問題を重く受け止め外来種被害予防三原則『持ち込まない』『捨てない』『捕めない』を心にとめ、未来のために、外来種問題に取り組んでゆかねばな

り、逃げ出したりして野生化した動植物を「外来生物（外来種、移入種）」と呼びます。我が国に生息する外国起源の生物の数は分かっていないだけでも約2000種ともいわれます。これらは、意図的、非意図的の違いはありますが、人間の活動に伴って日本に入ってきているという点で共通しています。外来種の中には、畑を荒らしたり、漁業の対象となる生物を食ったり、危害を加えたりして、農林水産業に被害を及ぼすものもいます。その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を「侵略的外来種」と呼ばれます。「侵略的」というと、何か恐ろしい生き物と思われがちですが、本来の生息地ではごく普通の生き物として生活していたのです。たまたま持ち込まれた場所が、その外来種にとって住みやすい環境であったり、食べやすい生き物や農作物が豊富にあったりすることによって大きな影響を引き起こしてしまっただけで、決してその生き物の自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。

日本では「ごく普通に見られる錦鯉が世界各地で侵略的外来種に指定されているのと同じことです。

「侵入・侵略的外来種」という表現は、人間の身勝手な発想からでた用語だと思えます。外来種がいることのよ

うな悪いことが起きるのでしょうか？

最も心配されているのは、生態系への影響です。生態系は、そこに共生する種の間での微妙なバランスのもと成立しています。そこに外来種が入ってくると、外来種が入ってくるにより、在来種が食べられたり、餌を横取りされたり在来種との間で競争が起こり、在来種は駆逐され食物連鎖のバランスが大きく崩れます。交雑による遺伝的攪乱も起こります。例としてはアイワンザルとニホンザルの交雑の事例が有名です。毒を持っている外来種が入ってくると、咬まれたり、刺されたりして人の生命や身体に危険が生じる恐れがあります。このように外来種の影響も大きいです。

全ての外来種が悪影響を及ぼすわけではなく、自然のバランスの中に順応してし帰化してしまう生物もいます。外来種が定着し爆発的に増え、在来種を圧倒するようになると、これを完全に駆除して

以前の生態環境を取り戻すことはほとんど不可能に近いといわれています。定着過程初期での対策が重要になってきます。一度破壊された自然環境を元に戻すには長い時間が必要です。自然環境が戻ったとしても、生態系は元に戻るとは限らないのです。

外来種による深刻な問題が日本でも数多く発生しています。沖縄県や鹿児島県奄美大島に、ハブ退治のために意図的に導入したマングースがいます。ハブは夜行性なのに、マングースは昼行性のため、肝心のハブ退治には効果が無く、かえって貴重な在来種がマングースにより迫害を受けています。アマミノクロウサギや国の天然記念物のヤンバルクイナの絶滅が危惧される状況になっています。

大なり小なりこのようなことが日本中で起こっているのです。多くの外来種が生息する日本において、何が日本固有の在来種で、何が外来種であるのか判断としない状況になっています。

今後、私達一人一人が、外来種問題を重く受け止め外来種被害予防三原則『持ち込まない』『捨てない』『捕めない』を心にとめ、未来のために、外来種問題に取り組んでゆかねばな

外来種を考える 生態系破壊

世界中の人達が、世界中のあらゆる場所に持ち込み、野外に放し

たり、逃げ出したりして野生化した動植物を「外来生物（外来種、移入種）」と呼びます。我が国に生息する外国起源の生物の数は分かっていないだけでも約2000種ともいわれます。これらは、意図的、非意図的の違いはありますが、人間の活動に伴って日本に入ってきているという点で共通しています。外来種の中には、畑を荒らしたり、漁業の対象となる生物を食ったり、危害を加えたりして、農林水産業に被害を及ぼすものもいます。その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を「侵略的外来種」と呼ばれます。「侵略的」というと、何か恐ろしい生き物と思われがちですが、本来の生息地ではごく普通の生き物として生活していたのです。たまたま持ち込まれた場所が、その外来種にとって住みやすい環境であったり、食べやすい生き物や農作物が豊富にあったりすることによって大きな影響を引き起こしてしまっただけで、決してその生き物の自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。

日本では「ごく普通に見られる錦鯉が世界各地で侵略的外来種に指定されているのと同じことです。

「侵入・侵略的外来種」という表現は、人間の身勝手な発想からでた用語だと思えます。外来種がいることのよ

うな悪いことが起きるのでしょうか？

最も心配されているのは、生態系への影響です。生態系は、そこに共生する種の間での微妙なバランスのもと成立しています。そこに外来種が入ってくると、外来種が入ってくるにより、在来種が食べられたり、餌を横取りされたり在来種との間で競争が起こり、在来種は駆逐され食物連鎖のバランスが大きく崩れます。交雑による遺伝的攪乱も起こります。例としてはアイワンザルとニホンザルの交雑の事例が有名です。毒を持っている外来種が入ってくると、咬まれたり、刺されたりして人の生命や身体に危険が生じる恐れがあります。このように外来種の影響も大きいです。

全ての外来種が悪影響を及ぼすわけではなく、自然のバランスの中に順応してし帰化してしまう生物もいます。外来種が定着し爆発的に増え、在来種を圧倒するようになると、これを完全に駆除して

以前の生態環境を取り戻すことはほとんど不可能に近いといわれています。定着過程初期での対策が重要になってきます。一度破壊された自然環境を元に戻すには長い時間が必要です。自然環境が戻ったとしても、生態系は元に戻るとは限らないのです。

外来種による深刻な問題が日本でも数多く発生しています。沖縄県や鹿児島県奄美大島に、ハブ退治のために意図的に導入したマングースがいます。ハブは夜行性なのに、マングースは昼行性のため、肝心のハブ退治には効果が無く、かえって貴重な在来種がマングースにより迫害を受けています。アマミノクロウサギや国の天然記念物のヤンバルクイナの絶滅が危惧される状況になっています。

大なり小なりこのようなことが日本中で起こっているのです。多くの外来種が生息する日本において、何が日本固有の在来種で、何が外来種であるのか判断としない状況になっています。

今後、私達一人一人が、外来種問題を重く受け止め外来種被害予防三原則『持ち込まない』『捨てない』『捕めない』を心にとめ、未来のために、外来種問題に取り組んでゆかねばな

り、逃げ出したりして野生化した動植物を「外来生物（外来種、移入種）」と呼びます。我が国に生息する外国起源の生物の数は分かっていないだけでも約2000種ともいわれます。これらは、意図的、非意図的の違いはありますが、人間の活動に伴って日本に入ってきているという点で共通しています。外来種の中には、畑を荒らしたり、漁業の対象となる生物を食ったり、危害を加えたりして、農林水産業に被害を及ぼすものもいます。その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を「侵略的外来種」と呼ばれます。「侵略的」というと、何か恐ろしい生き物と思われがちですが、本来の生息地ではごく普通の生き物として生活していたのです。たまたま持ち込まれた場所が、その外来種にとって住みやすい環境であったり、食べやすい生き物や農作物が豊富にあったりすることによって大きな影響を引き起こしてしまっただけで、決してその生き物の自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。

日本では「ごく普通に見られる錦鯉が世界各地で侵略的外来種に指定されているのと同じことです。

「侵入・侵略的外来種」という表現は、人間の身勝手な発想からでた用語だと思えます。外来種がいることのよ

うな悪いことが起きるのでしょうか？

最も心配されているのは、生態系への影響です。生態系は、そこに共生する種の間での微妙なバランスのもと成立しています。そこに外来種が入ってくると、外来種が入ってくるにより、在来種が食べられたり、餌を横取りされたり在来種との間で競争が起こり、在来種は駆逐され食物連鎖のバランスが大きく崩れます。交雑による遺伝的攪乱も起こります。例としてはアイワンザルとニホンザルの交雑の事例が有名です。毒を持っている外来種が入ってくると、咬まれたり、刺されたりして人の生命や身体に危険が生じる恐れがあります。このように外来種の影響も大きいです。

全ての外来種が悪影響を及ぼすわけではなく、自然のバランスの中に順応してし帰化してしまう生物もいます。外来種が定着し爆発的に増え、在来種を圧倒するようになると、これを完全に駆除して

以前の生態環境を取り戻すことはほとんど不可能に近いといわれています。定着過程初期での対策が重要になってきます。一度破壊された自然環境を元に戻すには長い時間が必要です。自然環境が戻ったとしても、生態系は元に戻るとは限らないのです。

外来種による深刻な問題が日本でも数多く発生しています。沖縄県や鹿児島県奄美大島に、ハブ退治のために意図的に導入したマングースがいます。ハブは夜行性なのに、マングースは昼行性のため、肝心のハブ退治には効果が無く、かえって貴重な在来種がマングースにより迫害を受けています。アマミノクロウサギや国の天然記念物のヤンバルクイナの絶滅が危惧される状況になっています。

大なり小なりこのようなことが日本中で起こっているのです。多くの外来種が生息する日本において、何が日本固有の在来種で、何が外来種であるのか判断としない状況になっています。

今後、私達一人一人が、外来種問題を重く受け止め外来種被害予防三原則『持ち込まない』『捨てない』『捕めない』を心にとめ、未来のために、外来種問題に取り組んでゆかねばな

り、逃げ出したりして野生化した動植物を「外来生物（外来種、移入種）」と呼びます。我が国に生息する外国起源の生物の数は分かっていないだけでも約2000種ともいわれます。これらは、意図的、非意図的の違いはありますが、人間の活動に伴って日本に入ってきているという点で共通しています。外来種の中には、畑を荒らしたり、漁業の対象となる生物を食ったり、危害を加えたりして、農林水産業に被害を及ぼすものもいます。その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を「侵略的外来種」と呼ばれます。「侵略的」というと、何か恐ろしい生き物と思われがちですが、本来の生息地ではごく普通の生き物として生活していたのです。たまたま持ち込まれた場所が、その外来種にとって住みやすい環境であったり、食べやすい生き物や農作物が豊富にあったりすることによって大きな影響を引き起こしてしまっただけで、決してその生き物の自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。

日本では「ごく普通に見られる錦鯉が世界各地で侵略的外来種に指定されているのと同じことです。

「侵入・侵略的外来種」という表現は、人間の身勝手な発想からでた用語だと思えます。外来種がいることのよ

チャット 一服



弘法大師と犬の話



昔、イヌは三本足でした。弘法大師さまは三本足では不自由だろうから、一本ふやして四本にしてやろうと、五徳から一本取ってイヌに付けてやりました。

五徳は四本足でしたが、それから三本足になったそうです。イヌは喜んで大師様にもらった足に、「しょんべん」をかけたら罰が当たるとい、そのたびにその足を持ち上げてするようになったそうです。※五徳・火鉢や囲炉裏などに置いて、鉄びんなどをかける鉄製の道具。(川俣町HPより)

弘法大師と犬にまつわる話は沢山残っています。弘法大師(空海)を高野山に導いた白黒二匹の犬の話は有名です。

理は、増加傾向にある一部鳥獣の生息数の管理をおこない、野生鳥獣と人間社会の共存を図る目的です。決して「愛護」を否定するものではありません。野生鳥獣に関する限り「保護・管理」の立場を優先し共存を図るべきと考えます。

動物保護と愛護... 似た用語で鳥獣保護・管理があります。個体の減少がみられる野生鳥獣がある一方で、生息数が激増し生態系や農林水産業に深刻な被害が及ぶことがあります。人間が野生鳥獣と上手に付き合うため

動物保護と愛護



は、野生鳥獣を人間の管理下におき、個体数や生息密度をコントロールし、適正化を図ることが鳥獣保護・管理です。また、人間活動によって圧迫されて弱い立場に追い込まれている動物を救い守るといった意味合いもあります。

「犯人が呪い殺されることを願わずにはいられない」「胸が苦しくなるような話 獣医さんも苦しかったろうな」ということも現実です。私達が目指している鳥獣保護・管理は、増加傾向にある一部鳥獣の生息数の管理をおこない、野生鳥獣と人間社会の共存を図る目的です。決して「愛護」を否定するものではありません。

動物愛護とは、人間が持つ感情であって、意図的なものではない。傷ついても、死ななくてもいい動物を「かわいそう」に思うことは、人としての自然な心情です。愛護の対象が犬や猫などのペットが中心です。近年では、捉え方には落差がありますが、家畜や野生鳥獣などへもその精神は及んでいきます。

「滋賀県彦根市野田山の住宅資材工場で、左耳から右耳にかけて長さ約35センチの矢が貫通したサルが見つかり、同市職員らが保護した。獣医師の判断で県が安楽死させた」と読売新聞が報道。ショッキングな報道で、読者の反響は大きくウェブページに多くの投稿があり、激論が交わされています。

動物を見つけたら、救ってやりたいと思うのは人間の自然な心、愛護の精神ですが、農林業被害や生態系破壊が大きな社会問題になっているという、見過ごしに出来ない現状があるということも現実です。私達が目指している鳥獣保護・管理は、増加傾向にある一部鳥獣の生息数の管理をおこない、野生鳥獣と人間社会の共存を図る目的です。決して「愛護」を否定するものではありません。

りません。動物愛護とは、人間が持つ感情であって、意図的なものではない。傷ついても、死ななくてもいい動物を「かわいそう」に思うことは、人としての自然な心情です。愛護の対象が犬や猫などのペットが中心です。近年では、捉え方には落差がありますが、家畜や野生鳥獣などへもその精神は及んでいきます。

「犯人が呪い殺されることを願わずにはいられない」「胸が苦しくなるような話 獣医さんも苦しかったろうな」ということも現実です。私達が目指している鳥獣保護・管理は、増加傾向にある一部鳥獣の生息数の管理をおこない、野生鳥獣と人間社会の共存を図る目的です。決して「愛護」を否定するものではありません。

「滋賀県彦根市野田山の住宅資材工場で、左耳から右耳にかけて長さ約35センチの矢が貫通したサルが見つかり、同市職員らが保護した。獣医師の判断で県が安楽死させた」と読売新聞が報道。ショッキングな報道で、読者の反響は大きくウェブページに多くの投稿があり、激論が交わされています。

サル出没情報



A群は、先月と同じく、青蓮寺湖周辺に集中して、集落への出没は少なくなっています。だが、来ないと思いつまらず、万全の対策を怠らないことが重要です。今年も、全国的に山々の実なりの悪い年だといわれています。山での食べ物が無くなれば必ず畑にやってきます。

A群では、10月に入り受信不能が続いています。電池切れなどが予想されます。だが、10月7日青蓮寺湖冒険広場付近で20頭程が目視されて以来、A群の行方は不明です。伊賀群エリアまで捜索域を広げ探しています。手がかりがないといえます。伊賀群との合流も考えられますが、電池切れであれば伊賀群エリアで名張A群を特定することは困難です。伊賀市・名張市は早急な善後策をたてる必要があります。

名張B群移動状況 平成30年9月21日～平成30年10月20日

名張A群移動状況 平成30年9月21日～平成30年10月20日

